

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題 「現代ムスリム知識人の変容と交流」 令和2年度第2回研究会

日時 令和3年1月30日土曜日

午後1時～午後5時

場所 Zoomによるオンライン開催

報告

小林周（AA研共同研究員、日本エネルギー経済研究所・主任研究員）

「現代リビア政治におけるイスラーム知識人：2011年内戦が与えた変化」

相島葉月（AA研共同研究員、国立民族学博物館・准教授）

「現代エジプトにおけるムスリム知識人とメディア化するイスラーム」

※非公開

本年度第1回研究会に引き続き、現代ムスリム知識人像について整理することを目的に、リビア及びエジプトの事例を説明する作業に取り組んだ。

リビア（小林報告）については、ムスリム知識人の政治・社会的影響力の検討を中心として、同国の世界イスラーム・ダアワ協会（WICS）を事例に報告がなされた。具体的には、WICSがカッザーフィー元指導者の政治・宗教思想の普及を目的に、政権の対外工作やアフリカ諸国での啓蒙活動を進めた他、国外のウラマーとの交流の場となるプラットフォームとして機能してきたことが説明された。この上で、同国ではカッザーフィーが宗教思想の発信を行い、WICSを含めた国家機構がそれを補佐するメカニズムが成り立っていたが、2011年の内戦以降は「親カッザーフィー」と見なされる宗教勢力・思想等が弾圧にあう等の状況が生まれたことが指摘された。

エジプト（相島報告）については、イスラームについて語るという行為が誰に許されてきたのかを前近代から遡って確認することで、知的エリートのカリヤ形成の傾向が（同時に、アズハル総長や国家ムフティーといったその「ゴール」と呼べるものについても）整理された。この上で近代以降、アズハル総長や国家ムフティーといった伝統的な官職に限らない在野のイスラーム権威が数多く生まれたこと、その背景として、イスラーム政治運動の興

隆に加え、メディアの多様化、つまりラジオ、カセット、インターネット等を通じた新しいムスリム知識人層が形成されていることについて説明がなされた。

(了)